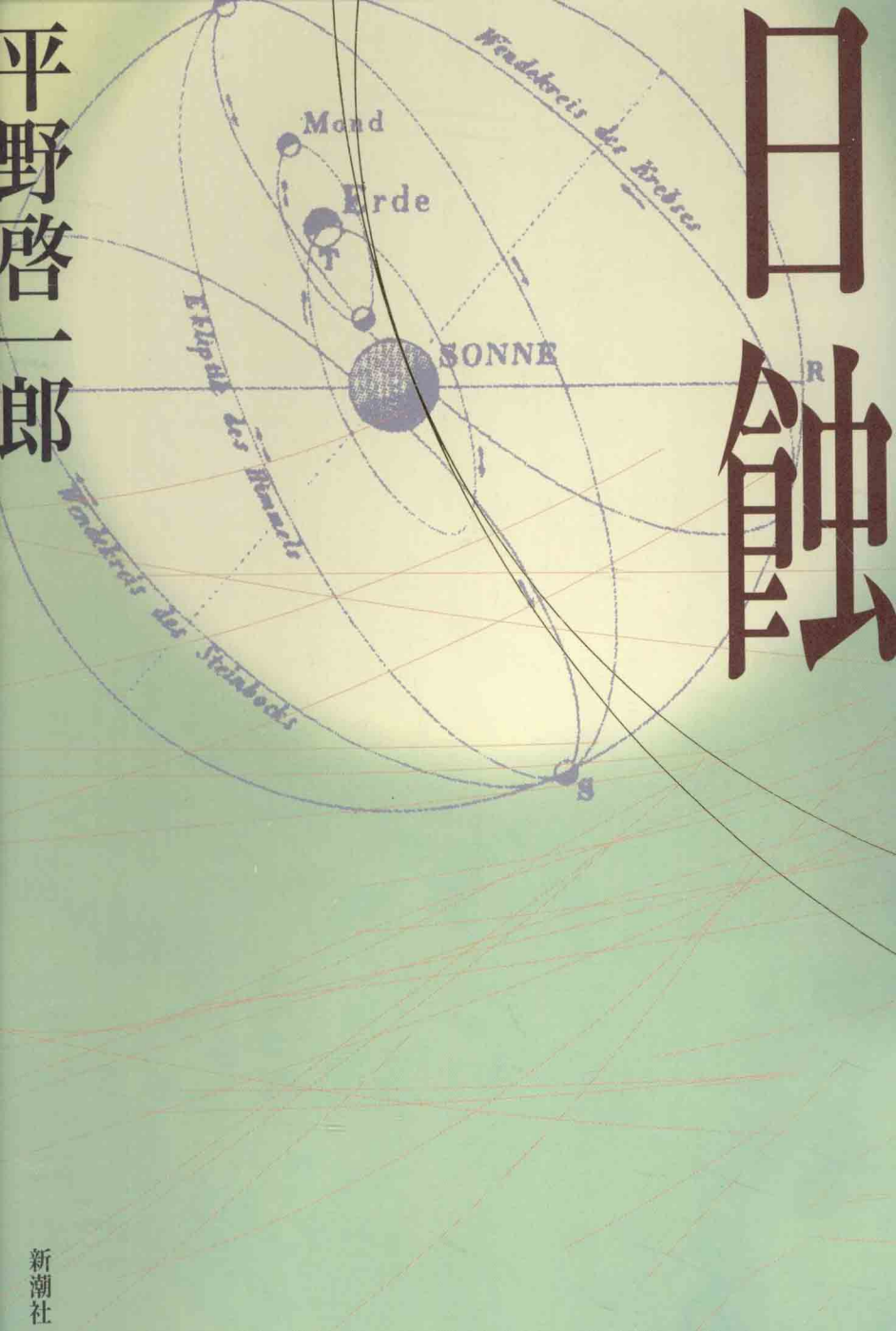
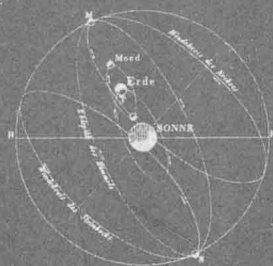


平野啓一郎

日蝕



日蝕



平野啓一郎

新潮社

著者略歴

一九七五年、愛知県生まれ。福岡県立東筑高校卒業。現在、京都大学法学部在学中。文芸誌「新潮」に投稿した第一小説『日蝕』が巻頭に一举掲載され、話題を呼ぶ。



につ　しよく 日　蝕

著　者………ひらの けいちろう平野啓一郎

発　行………1998年10月15日

4　刷………1999年1月25日

発行者………佐藤隆信

発行所………株式会社新潮社

郵便番号162-8711 東京都新宿区矢来町71

電話　編集部(03)3266-5411

読者係(03)3266-5111

振替　00140-5-808

印刷所………大日本印刷株式会社

製本所………大口製本印刷株式会社

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

© Keiichiro Hirano 1998, Printed in Japan

ISBN4-10-426001-0 C0093

日
蝕

装帧
新潮社装帧室

神は人を樂園より追放し、

再度近附けぬように、その地を火で囲んだのだ

——ラクタンティウス「神の掟」

これより私は、或る個人的な回想を録しるそうと思っている。これは或いは告白と云つても好い。そして、告白であるが上は、私は基督者キリストとして断じて偽らず、唯真実のみを語ると云うことを始めに神の御名に於て誓つて置きたい。誓いを此処に明あきらかにすることには二つの意義が有る。一つは、これを読む者に対するそれである。人はこの頗る異常な書に對して、徑ただちに疑うたがいを挿はきむであらう。私はこれを咎とがめない。如何に好意的に読んでみたとして、この書は所詮、信を置く能わざる類たぐひのものだからである。多言を費して無理にも信ぜしめむとすれば、人は仍なおその疑を深めゆく許ばかりであらう。然るが故に、私は唯、神に眞實を誓うと云う一言を添えて置くのである。今一つは、私自身に對するそれである。筆やを行ふほどに、私は自らの実験したる所に耐えずして、これを偽つて叙さむとするやも知れない。或いは、未だ心中に蔵匿せられたること多にして、中途で筆を擱おかむとするやも知れない。これは猶偽りを述べむとするに変わる所が無い。これらを虞おそれるが故に、私は誓いを敢えて筆に上し、以て己を戒めむとするのである。

冀こゝろが、上の誓いと俱に、下の拙き言葉の数々が主の御許へと到いたかむことを。――

千四百八十二年の初夏、私は巴黎からの長い旅路を経て、孤り徒より里昂に至った。回想の始めとして、私は先ずこれに及ぶまでの経緯を簡単に明して置こうと思う。

巴黎大学に籍を置き、神学を学んでいた私は、当時の自分の乏しい蔵書の中に、或一冊の古びた写本を有していた。一体、写本とは云つても、凡そ本としての体裁は整つておらず、表紙も無く、所々に随分と脱簡が看られ、就中前半の頁はそっくり抜け落ちてしまつていたから、寧ろ写本の一部とでも云つておいた方が好いのかも知れない。内容は羅甸語に翻訳せられた異教徒の哲学書らしかったが、書名は頁と俱に失われていて不明であつた。私がこれを如何なる事情を以て手に入れたのかは、今では解らない。或いは、知人が外遊先から持ち帰つたものを譲り受けてもしたのかも知れないし、或いは又、それを借りた儘で返さずにいたのかも知れない。私の交遊の範圍などはその頃より知れたものであるから、無理にもそのいきさつを突き止めむとすれば協わぬこともあるまいが、そのこと自体は然して重要でもないから、兎に角先へ進むことにする。

私はこの得体の知れぬ写本に頗る興味を抱いていた。そして、座右に置き折に触れて読み返してみても、孰れ是非ともこの完本を落掌したいと願うまでになつていた。

書名は聴^{やぶ}て明^{あきらか}になった。即ち、千四百七十一年に仏^{フイ}稜^{レン}で上梓せられたマルシリオ・フィチイノの『ヘルメス選集』であつた。これを調べるには、私は些か骨を折らねばならなかつた。と云うのも、今では遍^{あまね}く知れ渡つたこの著名な書物でさえも、当時の巴^バ黎^リに於ては、未だ極限られた人のみの識る所であるに過ぎなかつたからである。それ故に、どうにかその原本を求めむとする私の努力は、悉^{ことごとく}功を奏せず、学業の傍ら八方手を尽くしてはみたものの、終^{つい}にそれを得ることは協わなかつた。

然るに、このことを聞き附けた或る儕^{せい}輩^{はい}は、私に里昂^{リオン}に行くことを勧めた。彼はこう云つた。巴^バ黎^リではやはりそれを手に入れることは出来まい、しかし、地中海諸国との貿易の昌^{さか}んな里昂^{リオン}であれば、懼^{おそ}らくはその手の文^{ぶん}献^{けん}も見附かるであらう、私が為にも、亜^{アル}力^{ツプス}伯^バを越え、仏^{フイ}稜^{レン}にまで赴くのは些か難儀であらうが、里昂^{リオン}までであれば然^さ程^{ほど}苦にもなるまい、と云つた。

この忠言が、如何許りの真実を含んでいたのかは解らない。私は今、そのことを、寧ろ頗る疑わしく思う。何故と云うに、サンフォリアン・シャンピエに縁^よつてフィチイノの思想が里昂^{リオン}に齎^{もたら}されたのは、これよりも遙かに後のことだからである。

しかし、当時の私は、この詞^{ことば}の真偽に就いて慥^{たし}かめるを得なかつた。私には、それをするに足るだけの充分の智識も、又充分の時間も無かつたからである。それが故に、私は猶

胸中に多少の疑を抱きつつも、兎に角この儕輩の詞に従うこととし、学士の号を得た機会に、単身巴黎を發たむと意を決したのであった。

——これが、私が里昂へと赴いた直接の切掛である。しかし、私は仍この記述に歉らない。そして以下に、更に若干の事情を附記せむと欲する。上の記述は、纔かに私と旅とを繋ぐ接点に就いてのみ語つたに過ぎぬからである。

……前に私はその手の文献と書いた。これは、既に百年以上も前から地中海の一部の都市で見られるようになっていた、復興せられた異教徒の哲学書のことである。フィチノの『ヘルメス選集』は、その中の最も著名で且最も重要なものの一つだったのである。私が里昂に行くことを決めたのは、慥かに、上に見えている如く『ヘルメス選集』を手になむが為であった。しかし、今一つの理由として、当地でこれらの文献の幾つかをも併せて入手し得るかも知れぬと期する所が有つたからである。

古代の異教哲学に対して、私は甚だ関心を有していた。不遜を懼れずに云うならば、それは、十三世紀に聖トマスを抱いていたであろう或る種の切迫した危機感と同様の意識に由来するものであった。それは云わば憂慮であった。聖トマスがアリストテレスの哲学を我々の神学を以て克服したように、私は再度興つたこれらの異教哲学を、主の御名の下に

秩序付ける必要を痛切に感じていたのである。私の不安は、密にプラトン及びそれに続くアレキサンドリアの歴史の里亜学派の受容の問題にのみ帰せられるべきではなかった。迫劫する巨大な海嘯は、前述のヘルメス・トリスメギストスの著作は云うに及ばず、その他の有相無相の魔術や哲学をも呑食して、將に我々の許へと到らむとしていた。私が讀んでいたのは、その無秩序な氾濫である。河を上り来る水は、煌めく魚鱗を伴って、慥かに我々に多くの潤いを与えるかも知れない。しかし、一度地に溢れ出せば、必ずやそれは数多の麦を腐敗せしめる筈である。異教徒達の思想も亦、これに違ふ所が無い。我々はその氾濫の為に、信仰が危機に瀕するを防がねばならなかった。その洪水が、我々の秩序を呑み尽くし底に鎮めむとするを防がねばならなかった。径ちに、迅速に。そしてそれが故に、私が為には、神学と哲学との総合と云う、既にして古色を帯びつつあった嘗ての理想は、本復して再度その意義を新にし、加之、それを実現することこそが、この現世で与えられた己の唯一つの使命であるとさえも信ぜられていたのである。

……今となってこの當時を顧るに、私はやはり若干の苦い思いを抱かざるを得ない。と云うのも、私のこうした意気込みに対して巴黎の儕輩達は如何にも冷淡であったからである。一つにこれは、彼等の樂觀的な憶測の為であった。彼等の多くは私の説く所の異教哲学

の脅威などと云うものは、杞憂に過ぎぬと考えていたのである。

或る者は、

「そんならお前は異端審問官になるが好かろう。折角、ドミニコ会士となったからにはな。」

と冷笑した。

この見当違いの忠告は、無論私の望む所ではなかった。

異端審問の制度を否定する気は無い。しかし、当時より既にして失敗しつつあったそれに、一体異教哲学の氾濫を阻止すべき力を求めることが出来たであろうか。事実、金銭目^め当^{あて}の魔女裁判は横行し、一部ではそれを俗権に委ねることさえ躊躇^{ためら}われなかったのである。勿論私は実態が総てそうであつたとは云わない。だが、縦^{よじや}それが正常に機能していたとしても、異端者を捕え焚刑に処した所で、人を異端へと導く思想そのものが放置せられ、仍^{なお}命脈を保っているのであれば、問題が解決せられたことにはならぬであらう。

抑^{そもそも}私の願ひは、異教哲学の排斥に在るのではなく、上^{かみ}に見えている如く、それを我々の神学^{しと}の下に吸収し、従属せしめることであつた。實際に、異教徒達の哲学的考察は或る部分に於ては真実である。但その無智なるが故に、屢^{しばしば}甚しき誤りに陥るを免れ得ない。

従つて、我々はそれを教義に照らして逐一げん閲し、その誤りの部分のみを論駁してゆくべきなのである。

斯主張するのは、固より私が或る思想の完全な放逐などは不可能であると考えているからである。哲學的正当性を含んだ儘に放逐せられた思想は、その正当性の故に必ずや復活する。そしてそれは、その誤つた部分をも正当なものとして須すつことなしには蘇り得ぬのである。それ故に、我々はそれが誤りを徹底的に断じつつも、斯様な哲學を總体として、我々の教義の下に服せしめてゆかねばならない。排斥するを以て、仍我々の教義の外にそれが放置せられるを許してはならない。云うなれば、毒を含んだ水さえをも、葡萄酒に変えてゆかねばならぬのである。——私はこれを可能と信じていた。何故ならば聖書の教えこそは、正にそれを可能ならしめる巨大さと深遠さとを備えているからである。

しかし、こう云う私の詞を逆手に取つて、又或る者は次のように反論した。

「それは貴方の傲慢と云うものですよ。成程貴方のおっしゃる通り、聖書の教えは、深遠です。そしてそれに比べて、無智なる異教徒達の哲學は、多くの誤りを含んだものでしょう。しかし、その誤りを論駁する為に、貴方はこの巨大な世界に就いて、何か一つでも語り得る所が有るでしょうか。一個の微小な被造物に過ぎぬ貴方が、神の創造したこの完まうたき

世界の秩序を理^り解^{かい}し、それを説くことなど、どうして出来ましようか。況^ましてや、それを通じて神を理^り解^{かい}しようなどと云うことは！……」

こう云った考^さえに、然も納得したように頷^{うなづ}く者は一人や二人ではなかった。私が前^{さき}に、態々^{わざわざ}しく月並な葡萄酒の譬^{たと}えを用いたのは、斯云う彼等が、印刷したかの如く決ま^きってポナヴェントウラの有名な詞を引くからである。

しかし、私はこれを敬虔^{けいけん}さとは考^さえなかった。或いはそれには、私が彼等の冷笑に歪^{よこしま}む口唇^{くちべん}を頗る侮蔑^{ぶべつ}していたのも手伝っていたかも知れない。自身の矜持^{けいぢ}を傷付けられまいと、蒼白^{そうはく}く凋^{しお}れた肉の薄い口唇^{くちべん}を顫^{ふる}わせながら、二三の同僚と目配せをして、然も相手を輕^{かろ}んじているような風^{ふう}をする彼等の為^{ため}草^{くさ}が、私には心底疎ましく思われていたからである。

——が、私が斯の如き詞を卑屈^{ひくつ}さと怠惰^{たいだ}との現れとしか感じ得^もなかったのは、勿論、元^{もと}はと云えば我々の主張の相違に由来する問題であつた。

當時の私の置かれていた立場を一言で云うのは難しい。しかし、表向きは半年程の小巡礼となつていたとは云え、学士の号を得た許りで、既に教授の職に携^{たづな}わることも決ま^きっていた私が、然^さして引止められることもない儘に旅立を許された所^{ところ}を看^みれば、凡その事情は察せられると云うものである。斯様な勝手な申出^{もうしで}は本来は受け容れられるべくもない筈^{はず}で

あった。それ故に、出立が認められたとは云つても、還歸後の籍の保証などは甚だ不慥かなものであった。

私が大学に籍を置いた十五世紀の後半には、普遍論争もほぼ終焉し、既にして唯名論が学界を席捲していた。勿論、巴黎大学と雖その例外ではなく、私の所屬していたドミニコ会の同僚の中にでさえも、唯名論を奉ずる者が多く在った。この事實は、少なからず私を失望せしめた。と云うのも、私が同大学に籍を置き、且又同修道会の会士となつたのは、聖トマスに対する尊敬と云う、唯その一念に因つていたからである。アヴェロエス主義とそれに導かれた詭弁的な二重真理説との痼が、ルフェエヴル・デタアブルと云う例外が在ったとは云え、アリストテレスそのものへの過度の不信として残っている一方で、オッカム主義を奉ずる者等が為にも、アリストテレスはその教条を打破すべき旧思想の象徴であり、聖トマスの構築した Summa の体系の如きに対しても、彼等はほぼ同様の見解に立っていたのである。

私は、齡に似合わぬ、時代遅れの珍奇なトマス主義者と目せられていたが、然りとて完く孤立していた訣でもなかった。当時の巴黎大学に於ては、少数ではあったが『聖トマス神学の擁護』を著したカプレオルスの為事を受け継ぎ、トマス主義の再興に力を注ぐ者等

が在ったからである。彼等と交りながら、私は時折、せめてあと半世紀早く生れていれはと云う、埒も無い憾悔を抱くことがあった。カブレオルスが歿したのは、千四百四十四年四月六日の事である。因みに、近年優れたトマス注釈書を著わした枢機卿カエタヌスの出生は、千四百六十九年二月十日の事である。つまり、私の旅立の年には、彼は纔かに十三歳の少年であつたことになる。……これに由つて覩れば、私のトマス研究に費やされた日々は、或いは、この二つの峰嶂の谷間を流れる、細やかな溪川の如きものであつたと云い得るのかも知れない。

——とは云え、私は啻にトマス主義者たることに充分の満足を得てはいなかつた。聖トマスの神学に対しては勿論常に畏敬の念を抱いてはいたが、その一方で、何処か知ら慊らぬ思いから、より進んだ世界の理解、つまりは神の理解を試みむが為には、やはりそれだに越えねばならぬものであらうとの考えを臆氣に持っていたのである。それ故私は、人の思惑と違い、偏狭であると云うよりは、却つて随分と曖昧な思想を抱いていたように思う。例えば、オッカムに就いては終にその主張を容れること能わなかつたが、他方でスコトゥスの研究に関しては、存外親近感を覚えていた。無論部分的にはあるが。又、異教哲学の克服と云う課題の為には、クザアヌスの神学からも慥かに相応の影響を被っていた

のである。

旅立に際して私に為された非難の一つは、私がトマス主義者としての責任を果たしてはいないと云うものであった。彼等は、私が戻つて来ることをだに危ぶんでいたのだから、私の旅を以て所詮は研究からの逃避に過ぎぬと看做したのである。しかしこれは、私の旅が或る種の英雄的決断を以て為されたと云うのと同じ程に、正鵠を射てはいないであろう。理由は上に見えている。聖トマスに関して云えば、私は今でも自身の思想の大部分を *Summa* に負うている位だから、影響云々に就いては論を須^もいるまでもないが、少しく冷めた見方をするならば、当時の私は、存外その学説そのものよりも、寧ろ彼の赫^{かぶ}かしい業績に対して素朴な憧憬を抱いていただけのような氣もする。……これは些か自嘲が過ぎるかも知れぬが、しかし孰れにせよ、私の思想は未成熟であり、私が為には自らの手に縁^よる古代の異教哲学の発見と研究とは、啻に人々を異端より救うのみならず、新しい神学の構築の爲の一つの契機たり得る筈であった。そして、アリストテレスの哲学に就いて正にそうであった如く、その内容を正しく解釈することさえ出来れば、未だ見ぬ異教徒達の哲学は、神へと至る新しい路の標^{しるべ}にすらなり得るものであらうと信ぜられていたのである。――